

取水口改良へ

葵区梅ヶ島・大代地区

静大生着手

静岡大(静岡市駿河区)の学生が17日、同市葵区梅ヶ島大代地区集落の小規模水道の取水口改良工事に着手した。同地区ではこれまで、落ち葉や砂などによる取水口の目詰まりが原因で断水が起こり、近隣住民は年10回ほどの維持管理作業を行っていた。住民の負担軽減を実現するために、学生らは19日まで集落に泊まり込み、活動する。

(社会部・駒木千尋)

同大農学部授業の一環で、除き、金網を取り付けるなど集まった学部生と、同大の藤本稜彦准教授の研究室に所属する院生が集まった。

初日は学生や住民の約20人が参加した。学生は、集落から約1・7キロ離れた溪流まで山道を歩いて、工事に必要な工具や資材を運搬した。現地では、住民と一緒に、取水口に詰まった落ち葉や泥を取り除き、金網を取り付けるなどして目詰まりしにくくした。「取水マス」の原型となる型枠を設置した。

活動は同大農学部と同地区が2007年から「一社一村しずおか運動」に取り組む中で、15年2月、住民から大学への相談がきっかけで始まった。これまで10回以上の現地調査を重ね、溪流の流量や、

目詰まりで断水 住民の負担軽減

取水マスを取り付ける最適な角度などを調べてきた。山道の整備も学生らが行ってきた。

同大院総合科学技術研究科修士課程2年の伊東さの子さん(24)は「自然相手の作業には予想外の困難も伴うが、住民の方の役に立てるよう手伝いたい」と話した。



近隣住民と一緒に取水口の改良工事に取り組む静大生ら＝静岡市葵区